



上：生徒はみんな音楽療法の時間が大好き。楽しみながら社会性や身体機能の維持、または向上を目指す。右：地元の音大生と一緒にキーボードを弾く中東さん。スーダン音楽とクラシックピアノをたがいに教え合っている。



音大生と交流!

同僚の声

ダルアルハナン知的障害者協会 教員  
アマル・アブダッラさん

アヤは学校に大きな変化をもたらしてくれました。音楽療法を受けた生徒たちは、集中力が増したり、ペンを握れるようになったり、情緒的に安定したりと、たくさんの良い変化を見せています。障害のある生徒たちを教えるのは大変なときもありますが、アヤはいつも私たちが気づかせてくれるので、職員みな感謝しています。



中東さんから障害者支援に携わる隊員たちは、体罰防止のためのワークショップを障害者のための教育施設で働く現地の職員に向けて開いている。活発な意見が飛び交う会議の様子。



隊員として活動中

音楽療法で障害者をサポート

想いをかたたち。それぞれがそれぞれの国際協力。経験を生かして、スーダンで活躍する。よりよい社会を築くため、現地の人々と直接ふれあう活動をする人もいれば、より広い視野で問題解決を図る人、縁の下で隊員を支える人もいる。立場は違っても想いは同じ。スーダンの発展に向けて尽力する人々の姿を追った。

ゼロからの活動が、大きな変化に。簡素なつくりの6畳ほどのセラピールーム——ここはスーダンの首都ハルツームの特別支援学校だ。中東愛さんがキーボードで演奏を始める、生徒たちが元気に歌い始めた。アメリカの「認定音楽療法士」の資格を持つ彼女は、障害者の心身の健康と発達の促進を目指して活動している。楽器もセラピールームも赴任した当初は学校になかった。「初めはみな音楽療法のことばかりで、保護者と信頼関係を築くことに専念し、徐々に理解を得ていきました」と、中東さんは話す。楽器をそろえるとすぐに音楽療法のセッションを開始し、保護者や同僚に見学してもらったり、音楽療法について説明した紙を配ったりと周囲に積極的に働きかけた。間もなく、その熱意にほだされた校長が、専用の部屋を用意してくれた。任期後半を迎えた中東さんの活動は、大きな実を結びつつある。ある生徒は以前より情緒的に安定し、またある生徒は感情表現が豊かになった。変化を感じた保護者が直接感謝を伝えてくれたこともあった。同僚たちも、生徒の変化からはもちろんのこと、中東さんの真摯な姿勢からも得るものが

あったようだ。「学校職員の一員としてチームワークを大事にしていることが評価されたのだと思います」と本人が言うように、音楽療法の時間外には同僚を手伝ったり、意見交換したり、相談し合ったりと、同僚と対等な立場で、助け合っ

充実した活動を支えるプロ意識。就学時間が終わった後は、生徒一人一人の音楽療法の記録をつけたり、翌日の準備をしたりして過ごしている。また、ほかの隊員と一緒に、障害者のための教育施設での体罰防止に向けた取り組みも行っており、そのための会議や政府機関とのやり取り、資料の作成、情報収集などにも時間を充てる。活動中心の生活の余暇には、地元の音大生と楽器を演奏するが、「効果的な音楽療法を提供するため、音楽をどのように使うかはつねに考えています」と話すように、そこにも生徒たちが好きなスーダン音楽を学び、活動に生かそうという目的がある。高いプロ意識を持つて活動する中東さん。任期を終えた後は大学院に進み、さらに専門性を高めていくつもりだという。中東さんの後任の隊員も、音楽療法士に決まった。スーダンに蒔いた音楽の新たな可能性が、着実に根を張りつつある。

信頼関係は音楽でつくる!



子どものころからの夢だった音楽療法士の夢を叶えアメリカで働いていた中東愛さん。現在はそのスキルを、障害者のケアに生かしている。

障害児・者支援

中東愛(なかつか・あい)さん  
派遣期間：2017年1月～2019年5月  
日本の大学を卒業後に渡米し、「認定音楽療法士」の資格を取得。アメリカの医療機関に約4年間勤務した後、JICA海外協力隊に参加する。スーダンでのアラビックネームは「アヤ」。

応募時を思い出してひと言!

- きっかけは 中学の教科書に載っていた看護師隊員の話に心を打たれた。
- 語学スキルは 大事な話は使い慣れた英語で。音楽療法のセッションはアラビア語のスーダン方言。
- 家族の反応は 治安を心配していたが、現地の情報を知り安心して送り出してくれた。

Republic of the Sudan  
スーダン

国名	スーダン共和国
首都	ハルツーム
通貨	スーダン・ポンド(SDG)
人口	4,053万人(2017年、世銀統計)
公用語	アラビア語、英語

アフリカで3番目に大きい国で、日本の約5倍の国土面積を持つ。古くからアフリカと地中海、中東との交点の役割を担い、他民族の侵入や王朝の勃興、キリスト教、イスラム教の伝播など、幾多の変遷を経てきた。200を超える民族が混在する、多様性豊かな国。

ハルツーム

JICA Sudan  
Japan International  
Cooperation Agency - Sudan Office  
الوكالة اليابانية للتعاون الدولي - مكتب السودان

北山敏之(きたやま・としゆき)さん  
元ハンガリー合気道隊員。帰国後、民間企業や協力隊事務局などに勤務。2002年より調整員。これまでにハンガリー、ナミビア、ケニアで勤務する。

尾田直美(おだ・なおみ)さん  
ファッション業界で約7年間仕事をした後、服飾デザインの協力隊員としてチュニジアに赴任。2017年よりスーダン事務所に所属して調整員を務める。

Inas Kamal M. Ramli  
(イナス・カマル・M・ラムリ)さん  
スーダン事務所での現地採用スタッフ。隊員の住居探しのサポートや通訳のほか、現地の人にしかわからない慣習を伝えてくれるなど、隊員にとって身近な存在。

隊員をサポート

# 隊員の活動を全力でサポート!

健康や安全、不測の事態への備えや心理的なサポートまで、隊員の活動を陰で支える現地スタッフをクロスアップ。

隊員の調子はどう?



中東さん (p.06) の赴任先の学校で、来期の派遣について話し合う尾田さんと校長先生。

協力隊の活動の管理や、安全対策、困ったときの相談役など、幅広く隊員を支えるのが、調整員と呼ばれる現地のスタッフ。スーダン事務所の北山敏之さん、尾田直美さんともまた、協力隊の経験者だ。「自分がやってもらったうれしかったことを、今の隊員にもしてあげたい」と話すのは、昨年から現職に就いた尾田さん。隊員としてチュニジアに赴任した当初、自分の仕事を見いだせなかった尾田さんを「焦らなくてもいい。あなたにしかできないことが必ず見つかる」と、調整員が元気づけてくれた。異国の地で活動する隊員たちは悩みや不安を抱えやすい状況にある。尾田さんはそのことをよく理解しているからこそ、彼らが

活動の成功よりも大事なことを、それは隊員一人一人の命を守る。ことだ。スーダンはアフリカ諸国の中でも比較的治安が良いが、安全対策には気を抜かない。「隊員に教育的な指導を行うだけでなく、つねに政情などの最新の情報にアンテナを張り、有事の際に隊員を安全に帰国させるためのシミュレーションを行うなど不測の事態に備えています。隊員が無事に任期を終えて帰国する時は正直ホッとします」と北山さんは話す。「隊員の成長に立ち会えることはこの仕事の醍醐味」と話してくれた二人。隊員たちが最大限の力を発揮できるように、サポートを続けていく。

## 協力隊の協力者として



配属先から中東さんの活動ぶりへの好意的なコメントを伝える尾田さん。隊員のモチベーション維持にも気を配る。

## 安全な活動への取り組み

いざという時に相談しやすいよう、日頃から密なコミュニケーションを心がけているという。しかし、どのような活動で任地の要望に応じていくのかは、あくまで隊員自身が決める。「彼らが行いたいこと、考えていることは決して否定しません。その上で、活動を模索している隊員には『こんな考え方もあるよ』と過去の成功事例を伝えることもあります。隊員が対話する中で問題解決のきっかけをつかんでくれればうれしいですね」と北山さんは言う。



過去 自動車整備隊員としてイエメン、スーダンへ

現在 職業訓練センターの訓練計画の実施支援



木村亮一(きむら・りょういち)さん  
派遣期間: 2008年3月~2010年1月(イエメン)、2010年9月~2011年8月(スーダン)  
自動車整備の専門学校を卒業後、一般企業で約5年間勤務。退職後、自動車整備隊員としてイエメン、スーダンに赴任。その間に知り合った民間企業の紹介でJICA専門家になる。  
\ 応募時を思い出してひと言! /

きっかけは 友人から協力隊の話聞き興味を持った。  
語学スキルは イエメン仕込みのアラビア語は、スーダン人から「話し方が硬い」と言われます。  
家族の反応は 「おもしろいことがあるといいね」と。

その調子!  
おしゃべりな!



製図の指導を行う木村さん。「スーダン人は、のんびりしてはいるものの勉強熱心です」。

隊員経験を生かす

# 現場を知るから できる支援がある

「興味本位」で海外に飛び出してから十余年。元隊員の専門家は、彼の力を必要とする人々のために今日もスーダンで奔走する。

## 出会いが拓いた国際協力之道

応募の理由は「正直に言えば興味本位」。友人から協力隊の話聞き、「途上国で生活してみても楽しいかも」という軽い気持ちで自動車整備の隊員になりイエメンへ。だが、その経験が木村亮一さんの人生を大きく変えた。

## 「現場」と「管理」のギャップを埋める

木村さんの仕事は訓練計画の実施支援だ。現場に張り付きだった頃と違い、計画立案や生徒を受け入れるための態勢づくりを行うなど管理能力が求められる。しかし意外にも協力隊時代の経験が役に立っているという。「現場は何か問題があれば組織や政府のせいとして問題をすり替えがち。しかし、政府は政府なりに資金や人材が不足する中で努力していることを知った今は、問題の見え方が違います。現場の事情をよく理解していただければ、解決の緒をつかむことも難しかったと思います」と話す。「職業訓練で新しいことをできるようにになった人の笑顔はなんにも代えがたい」。そう話す表情が、木村さんの国際協力の原点を物語っていた。